



発表資料はこちらから



複合的マイノリティ学生支援と当事者実態の乖離 —LGBTQ+学生支援と留学生支援の狭間に立つクィア留学生—

ミネソタ大学 大学院（高等教育研究）博士後期課程1年
澤田 彬良 (SAWATA, Akira)

2024年6月22日（土）異文化間教育学会 第45回大会

はじめに



日本政府のグローバル政策と「高等教育の国際化論」

留学生の増加に伴う、留学生内部の多様性への着目（大西, 2018）

→「マイノリティの中のマイノリティ」に対する学生支援の必要性（複合マイノリティ論の展開…）

“クィア留学生”という属性への着目

• 大西(2019)の論考

- 多くのクィア留学生からの学生相談を経験! → かれらが抱える問題の特殊性!
- 支援時の配慮: 情報共有と管理、相談に対する積極性の文化差、etc.

• Sawata(2023)・澤田(2024)の報告

- 出身国の強固な同性愛嫌悪の内面化、異性愛規範
- 学内コミュニティでの二重障壁 → 学外でも阻害感
- 外国人としての承認を得るためのクィアらしさの表象緩和

インターセクショナリティという視点



- Crenshaw (1989) : intersectionality / 交差性

不平等や不公正の事象は、単一の権力関係のみならず、複数の権力関係の交差によって生起する。交差的な権力関係によって生起する問題事象は、単一の領域からではとらえられず、その足し合わせ以上のもの(=特殊)である。

→ 単一型のマイノリティ学生支援を足し合わせても、交差性に置かれた複合的マイノリティ学生への支援としてはたり得ないのではないか？

留学生支援 + LGBTQ+学生支援

=複合的マイノリティとしての「クィア留学生」に対する支援はたり得ないのではないか？

研究目的と研究課題



【目的】

クィア留学生に対する学生支援の現状を明らかにし、クィア留学生の支援に携わりうる教職員のニーズの認識や課題感を描出する。これらにクィア留学生当事者らの視点と突き合わせることで、支援と当事者の間にいかなる乖離があるかを論究する。

【研究課題】

- ① クィア留学生に対する日本の**大学の支援現状**とはいかなるものか。
- ② **支援に携わる教職員**は、クィア留学生という複合的マイノリティのニーズをどのようなものと認識し、支援にいかなる課題を感じているか。
- ③ クィア留学生当事者らの知見と照らし合わせた際、支援に携わる教職員の認識と当事者の実存の間にいかなる**ズレ・乖離**があるか。

※本研究は筑波大学の倫理審査において承認を受けた上で行いました（課題番号:筑 2022- 186A）。

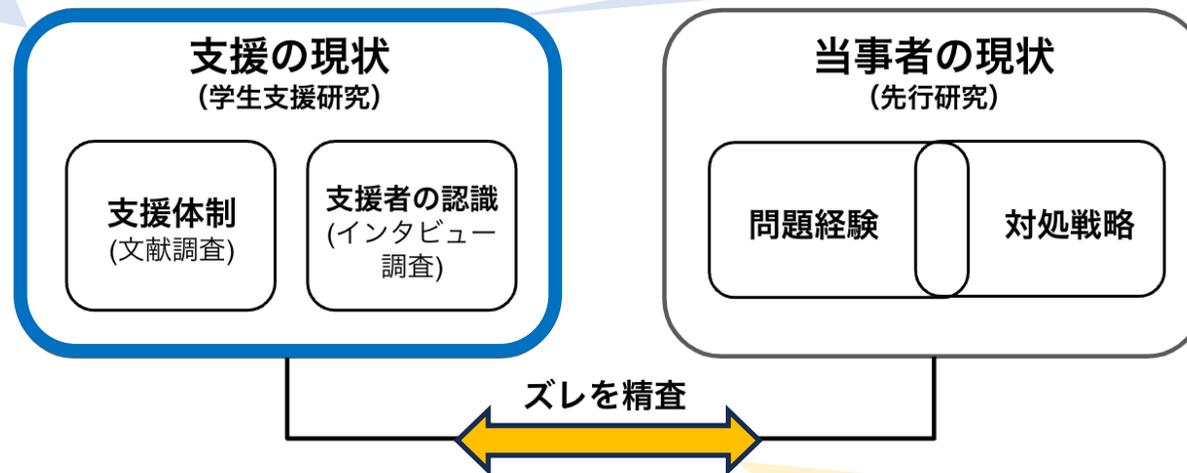
研究方法

① 支援現状は？

LGBTQ+学生支援に関するガイドライン*を対象に内容分析を行う。*オンラインで閲覧可能(2023/8~2024/1)。検索方法は吉田ら(2020)に倣う。

② 支援者の認識は？

支援に携わる教職員への半構造化インタビューから認識するニーズと支援上の課題を検討する。佐藤(2008)に倣い、得られたデータを分析する。



③ 支援と当事者のズレ？

クィア留学生の語り(Sawata, 2023; 澤田, 2024などを参照)に基づき、当事者学生の経験とRQ1,2の結果を統合することで、支援現状や支援者らの認識とのズレを指摘する。

クィア留学生という複合的マイノリティ

日本の大学におけるクィア留学生の生きられた経験（一例）

A) 出身国の強固な同性愛嫌悪の内面化、異性愛規範

出身国の文化社会的・宗教的風土が、性的マイノリティに対して抑圧的な場合、成長過程で同性愛嫌悪や異性愛規範を内面化する傾向がある。そのため、性的マイノリティとしてのアイデンティティ形成は緩やかで、性的マイノリティとしての自認や行動は控えめになる場合がある。

B) 学内コミュニティでの二重障壁 → 学外コミュニティでも疎外

同郷出身者・家族コミュニティの切り離し

性的マイノリティに非受容的な国出身の場合、同郷出身者や家族に自身のセクシュアリティがバレることを避けるため、留学生コミュニティ・出身国コミュニティ・家族から疎遠化しやすい傾向がある。ただし、日本国内のクィア・コミュニティにおいて人種・民族差別等に直面するなど、クィアとしても留学生としてもコミュニティが得られない場合がある。

C) 対処戦略としてのカミングアウト回避、外国人としての承認を得るためのクィアらしさの表象緩和

性的マイノリティ受容的な国出身の留学生でも、日本社会への帰属や日本人からの承認を得るために、カミングアウトを回避したり、クィアらしさを隠したりする傾向がある。

<p>留学生受け入れ10万人計画 1990s～ 留学生センターの設置拡大</p> <p>留学生受け入れ30万人計画 留学生獲得を目指す国際化+留学生支援の一本化 「グローバル人材」の育成を目指す。 「優秀な外国人学生の戦略的な受入れ」</p> <p>受け入れ体制の整備 日本の大学のグローバル化を（カリキュラム、授業言語、英語話者の教員、入学時期・システムの調整etc.） + 日本社会のグローバル化を</p> <p>日本語教育、就職支援などの強化… →日本の発展につながる 苅谷(2018)「経済ナショナリズム」</p>	<p>1983</p> <p>2008</p> <p>2012</p> <p>2015</p> <p>2016</p> <p>2019</p>	<p>厚労省『自殺総合大綱』</p> <p>文科省資料『性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について』 一橋大学アウティング(自殺)事件</p> <p>「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」*性同一性障害</p> <p>『大学等における性的指向・性自認の多様な在り方の理解増進に向けて』 雰囲気作り(尊重)、相談窓口、個別対応</p>
--	---	--

①変遷からみる支援間の差異

• 背景動機

- 留学生支援: **経済競争**原理に支えられた国際化推進の施策として。
- LGBTQ+支援: **自殺予防、障害者支援、リスクマネジメント**として。

• 開始時期

- 留学生支援: 留学生増加が著しい**1980年代**から。
- LGBTQ+支援: 各種政策や事件が注目された**2010年代**から。

• 拡大状況

- 留学生支援: **8割の大学留学生支援組織・日本の大学自体の国際化**を。
- LGBTQ+支援: **ほとんどの大学が専門組織を持たない・個別具体的な支援・多様性の尊重**を。

① 支援ガイドライン

2023年8月～2024年1月までの期間にオンライン(インターネット)上で検索。

検索ワードは「大学 + X」*X = LGBT, SOGI, 性的指向, 性自認, ジェンダーアイデンティティ, トランスジェンダー, セクシュアル・マイノリティ

74大学がLGBTQ+学生支援に係るガイドラインを策定している。

※ 全大学(793校(2023年時点))のうち、約9.3%が策定。

24大学がガイドライン全文を日本語以外の言語に翻訳している。

※ ガイドラインを策定する全大学のうち、約32.9%のみ翻訳している。

9割以上の大学が、LGBTQ+学生支援に関する全学的な取り組みを行って
おらず、ガイドラインを策定する大学でも、非日本語話者に対する情報共有は
進んでいるとはいえない。

①支援ガイドラインのなかの「クィア留学生」

30大学はLGBTQ+支援ガイドラインに「留学」の特記事項を設けている。

送出しのみ: 20大学、送出し&受入れ: 10大学の特記事項。

(50音順: 岩手大学、大阪大学、金沢大学、神戸大学、東北大学、長崎大学、名古屋大学、福島大学、明治大学、早稲田大学)

10大学が想定している(受け入れ)クィア留学生のニーズ

- ①学生寮・留学生寮、②受験・修学上の配慮、③孤立、④相談先での言語対応、⑤身体的治療の継続

10大学の想定支援方法

- (1) 個別相談対応(①②)、(2) ガイドラインでの啓発+個別相談対応(④⑤)
- (3) 個別相談対応 or 他部署・コミュニティ紹介(③)

※紹介先は大学ごとにさまざま、「国際交流センター」、「所属学部・大学院等事務室、各キャンパス国際教育事務室」、「英語ランチ会などのイベントの開催や、LGBTQ+学生がアクセスできるコミュニティ」など。

②支援者の認識(研究対象)

オンライン&対面. 半構造化面接法. 各支援に携わる教職員10名.

- クィア留学生のニーズや困難はどのようなものであると認識し、どんな支援を想定/実践しているのか？
- クィア留学生に対する支援を行う上での難しさや課題はどのようなものか？

大学	大学情報	氏名	支援を担当する学生の属性	職種	形態	担当歴
T	地方国立	Aさん	LGBTQ+	相談員	非常勤	3年
		Bさん	留学生	専門職員	有期契約	5年
U	都市部公立	Cさん	LGBTQ+、文化的マイノリティ	研究員	有期契約	8年
V	都市部私立	Dさん	ダイバーシティ全体	教員	正規	1年
W	都市部私立	Eさん	LGBTQ+	事務職員	正規	10年
		Fさん	留学生	事務職員	有期契約	3年
X	地方私立 (女子大)	Gさん	LGBTQ+、ジェンダー	教員	正規	5年
		Hさん	留学生	事務職員	正規	14年
Y	地方国立	Iさん	留学生	元センター長	正規	5年～
Z	都市部国立	Jさん	ダイバーシティ全体	教員	正規	4年

②支援者の認識（ニーズ・支援方法）

どんな困難・ニーズを想定していますか？どんな支援方法を想定していますか？

既存コミュニティの問題解決機能の期待

相談する必要がない、そんな困ってないというのがあるのかな、とは思います。あの、それぞれ、まあ、V大学に来る留学生さんなんかは他所の大学の人たちとかと結構交流があったりして、いろんなつながりがあるので、その自分達がもっているネットワークの中で、案外困りごととかを解消できているとか、そもそも困らないとかもあるのかなっていうのは少し感じたりしています。

（LGBTQ+支援担当のCさん）

性自認の悩み＞性的指向の悩みという想定

男の子が男の子を好きみたいなのは、あんまりその問題にはならないと思うんだけど、例えば、女の子が、男の子として生きたいとか、あるじゃない。そっち方面。（留学生支援担当のBさん）

支援方法の不明確さ

どこどこに相談すればいいかっていうのがはっきり（わからない）。で、どのように相談すればいいのかもわからないです。…この学生さんがLGBTでっていうのも、プライバシーの問題がありますよね。

（留学生支援担当のHさん）

② 支援者の認識（支援上の課題）

クィア留学生に対する支援を行う上で（これから行おうとする場合）の難しさ、課題はありますか？

ニーズの不透明さ

→ 決定機関・管理職への認識共有の難しさ

上層部へのアプローチについては、当事者というかたちで、目の前に実在しますよということを紹介しないかぎりにはなかなか概念的なものでしかないという感じ。… **当事者がインビジブルな場合だと何もできない。当事者がいないのに君はなぜそんなことを言うの**というふうになってしまう。（留学生支援担当のIさん）

→ 優先順位の問題

意識的にはね、（部署連携の）垣根は高くないんだと思うんですけど、やっぱりね、**いろんな業務があって、あの、優先順位が皆さんの中でそれぞれ違うじゃないですか。**で、この話題（＝クィア留学生の問題）が皆さんの中で2番目か3番目にありゃ、まだいいんですけど、まあ、もうちょっと横に置いといてとなると、なかなか進まない。… **複合している問題があっても、まず一つ一つの課題に対して、そもそも十分対応できているの**かっていうのがある。（LGBTQ+支援担当のCさん）

留学協定を結ぶ際の一つの基準として宗教的なケアをきかれることはあっても、LGBTQに関するケアをどれだけしていますか、という質問やニーズはほとんどなく、優先順位的には宗教的なケアの方が先に来て、LGBTQへのケアが優先順位的にややおちるということが見られました。（留学生支援担当のIさん）

→ 「**当事者の学生が言えば変わるんだろうけど…**」=当事者の可視化を求める声

【再掲】クィア留学生という複合的マイノリティ

日本の大学におけるクィア留学生の生きられた経験（一例）

A) 出身国の強固な同性愛嫌悪の内面化、異性愛規範

出身国の文化社会的・宗教的風土が、性的マイノリティに対して抑圧的な場合、成長過程で同性愛嫌悪や異性愛規範を内面化する傾向がある。そのため、性的マイノリティとしてのアイデンティティ形成は緩やかで、性的マイノリティとしての自認や行動は控えめになる場合がある。

B) 学内コミュニティでの二重障壁 → 学外コミュニティでも疎外 同郷出身者・家族コミュニティの切り離し

性的マイノリティに非受容的な国出身の場合、同郷出身者や家族に自身のセクシュアリティがバレることを避けるため、留学生コミュニティ・出身国コミュニティ・家族から疎遠化しやすい傾向がある。ただし、日本国内のクィア・コミュニティにおいて人種・民族差別等に直面するなど、クィアとしても留学生としてもコミュニティが得られない場合がある。孤独感・希死念慮に帰結も。

C) 対処戦略としてのカミングアウト回避、外国人としての承認を得るためのクィアらしさの表象緩和

性的マイノリティ受容的な国出身の留学生でも、日本社会への帰属や日本人からの承認を得るために、カミングアウトを回避したり、クィアらしさを隠したりする傾向がある。

③当事者学生の実存と支援の乖離

A) 出身国の強固な同性愛嫌悪の内面化、異性愛規範

LGBT概念を前提とした支援

「LGBT(等)」という属性に自己同一化できない/したくない者を包摂していない

性的指向に係る悩みの軽視

性別違和に関する支援中心の
対応ガイドライン

性的アイデンティティ未形成

出身国での否定的価値の内面化によるス
ティグマ・自己嫌悪の強さ

強い孤独感・希死念慮

性的指向のマイノリティ性と、宗教・文化・言
語・人種・民族が交差することによる

「LGBT」という概念や、「性同一性障害/性自認に関する悩み/トランスジェンダー」を想定・強調した施策のみでは、支援の網からこぼれ落ちていくクィア留学生も。

→ **“クィア(性的マイノリティ)”を画一視しない、交差的な支援認識が必要!**



③当事者学生の実存と支援の乖離

B) コミュニティ形成・維持に対する二重(多重)障壁



コミュニティ紹介という支援

「孤独」への対応としての、留学生コミュニティ・LGBTQ+コミュニティの紹介

既存コミュニティの問題解決機能に対する期待

留学生コミュニティへの障壁

同郷出身者や家族にセクシュアリティがバレることを恐れて他の留学生から孤立・距離化

LGBTQ+コミュニティへの障壁

外国人・人種民族差別、言語障壁によってLGBTQ+コミュニティから孤立・距離化



二重障壁・多重障壁によって、学内外のアイデンティティに基づくコミュニティにおいて居場所感を得られていない。そのことから、心理的援助や情動的援助などの資源を得られる既存コミュニティが実質的には存在しない、またはそれらを切り離す事例もみられた。

→ 既存コミュニティへの手離しの期待ではなく、新たなつながり方の模索や、既存コミュニティにおける風土寛容が必要!

③当事者学生の実存と支援の乖離

C) カミングアウト回避とクィアらしさの表象緩和



「当事者の可視化」を望む声

支援上の課題に対応するため

- ・ニーズや支援方法の不明瞭さ
- ・上層部への必要性共有の難しさ
- ・部署ごとの優先順位の異なり

カミングアウト回避

同郷出身者や家族にバレるリスク、出身国の否定的価値の内面化による

クィアらしさの不可視化

日本社会への調和・日本ではクィアらしさを強調しないという認識による



クィア留学生は、リスクを避けたり、日本社会によりよく馴染んだりするために、「カミングアウト回避」や「クィアらしさの不可視化」という戦略を日常実践として駆使している。

→ **クィア留学生の日常実践**を理解したうえで、オルタナティブな支援拡充方法の探求が必要!

本研究の結論

各支援の変遷

留学生支援とLGBTQ+学生支援の間には、支援拡充の背景動機、開始時期、拡大状況に大きな差異があり、とくにLGBTQ+学生支援は9割の大学において全学的に取り組むものとなっていない。

支援現状

クィア留学生という複合的マイノリティについては、情報保証の観点からも、特別なニーズの観点からも十分な取り組みは広がっておらず、現状、10大学のみで、かれらを対象に定めた支援について明文化されるにとどまっている。

支援者の認識

留学生支援ないしLGBTQ+学生支援に携わる教職員の多くは、クィア留学生のニーズや支援方法を具体的には認識していないことに加え、支援上の課題が複数存在する。

支援者と当事者の乖離

教職員から語られたある種の「想定」や、支援上の課題を克服するための「当事者の可視化」の求めは当事者学生の実態と乖離し、当事者らが置かれた交差的で複雑な状況を見落としているものといえる。

→ 単一型のマイノリティ学生支援モデルの足し合わせでは、交差性によって生まれる特殊な困難・ニーズに対応できない可能性が残る。

本研究の課題と展望

課題

- 支援者／当事者間の場所性・時間性が一致しないこと。

当事者学生が特定されえないように、当事者の通う大学と、支援者の勤める大学を一致させなかった。これにより、事例的な通史や文脈性を含んだ分析ができなかったという点に限界がある。また、支援も現在進行形で変化しているものであり、最新の施策がいかなる効果をもっているかについては検討の余地がある。

今後の展望

- そのほかの複合的マイノリティ学生の支援について

障害のある留学生、障害のあるLGBTQ+、子育て中の留学生etc. … 複合・交差 ≠ 二重

- 大学組織に組み込まれた支援が届かない部分へのアプローチについて

マイノリティの属性は幾重にも細分化しえるが、一支援者がすべての社会的属性に関する専門性を身につけることは難しい。組織間の連携を円滑にする方法や、大学が公的に提供するのではない支援資源のあり方の検討、学生間の相互扶助を促すような場の構築について検討したい。

参考文献(アルファベット順)

Crenshaw, K. (1989) Demarginalizing the intersection of race and sex: A black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. *University of Chicago Legal Forum*: Vol. 1989. 1 (8). 139-167.

文部科学省 (2015) 『性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について』

文部科学省、外務省、法務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省 (2008) 『「留学生30万人計画」骨子案』

日本学術会議法学委員会社会と教育におけるLGBTIの権利保障分科会 (2017) 『提言 性的マイノリティの権利保障をめざして—婚姻・教育・労働を中心に—』

日本学生支援機構 (2019) 『大学等における性的指向・性自認の多様な在り方の理解増進に向けて(教職員向け理解・啓発資料)』

大西晶子 (2018) 「留学生層の多様化に留意した学生支援—文化的多様性に対応した留学生支援の実践—」 『留学交流』93, 1-9.

大西晶子 (2019) 「国境を越えた留学生の受入れ—性的マイノリティ学生支援における留意点」 『留学生交流・指導研究』22, 7-15.

佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.

Sawata, A. (2023) Rethinking student support from the pain of queer international students: Intersectional support for intersectional individuals. *国立暨南国際大学與筑波大学教育交流研討會論文集*, 21-43.

澤田彬良 (2024) 「交差的な生を生きぬくための承認をめぐるジレンマ—「LGBTに受容的な国」出身のクィア留学生のアイデンティティ交渉に着目して—」 『九州大学教育社会学研究集録』第27号, 37-46.

澤田彬良 (印刷中) 「交差的属性に基づくコミュニティ形成過程と対処戦略—居場所感欠如をめぐるアジア出身ゲイ留学生の語りを事例として—」 『異文化間教育』第60号.

栖原暁 (2010) 「「留学生 30 万人計画」の意味と課題」 『移民政策研究』2, 7-19.

寺倉憲一 (2009) 「我が国における留学生受入れ政策—これまでの経緯と「留学生30万人計画」の策定—」 『レファレンス』59(2), 27-47.

吉田あけみ・東珠実・小倉祥子・影山穂波・藤原直子 (2020) 「女子大学におけるLGBs等の大学施策の現状—全国の女子大学HP情報を中心に」 『「女性論」プロジェクト研究報告』

吉田文 (2018) 「高等教育の拡大と学生の多様化—日本における問題の論じられ方—」 『高等教育研究』21, 11-37.

付録1：ガイドライン（受入れ留学生に関する記載あり10校）

岩手大学: 国立大学法人岩手大学ダイバーシティ推進室（2022）『国立大学法人岩手大学性の多様性（LGBT／SOGI）に関する対応ガイドライン』 https://diversity.iwate-u.ac.jp/wp-content/uploads/2023/03/iwate-university_lgbtsogi_guidelines-1.pdf

大阪大学: 大阪大学学生生活委員会（2019）『「性的指向（Sexual Orientation）」と「性自認（Gender Identity）」の多様性に関する学生への配慮・対応ガイドライン』 <https://www.osaka-u.ac.jp/ja/campus/life/2101>

金沢大学: 金沢大学ダイバーシティ推進機構（2023）『LGBTQ+サポートガイドVer.1. ～LGBTQ+フレンドリーなキャンパスの構築を目指して～』 https://ipdi.w3.kanazawa-u.ac.jp/LGBTQ_supportguidebook/?pNo=12

神戸大学: 神戸大学ダイバーシティ推進宣言（2022）『神戸大学における多様な性・ジェンダーに関する基本方針とガイドライン』 https://www.kobe-u.ac.jp/documents/NEWS/info/svsc/2022_09_27_01.pdf

東北大学: 東北大学（2023）『みんなが主役 多様な性に関するガイドライン』 <https://www.tohoku.ac.jp/japanese/entrance/2023/data/diverse.pdf?20230331>

長崎大学: 長崎大学ダイバーシティ推進センター（2022）『LGBT+ Guidelines 長崎大学LGBT等性的マイノリティに関する対応ガイドライン』 <https://www.cdi.nagasaki-u.ac.jp/lgbt-guidelines/>

名古屋大学: 名古屋大学（2021）『LGBT等*に関する名古屋大学の基本理念と対応ガイドライン』 https://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/upload_images/20220809_kyodo_sankaku_J.pdf

福島大学: 福島大学（2022）『福島大学における多様な性・性的マイノリティに関する基本理念と対応ガイドライン』 <https://www.fukushima-u.ac.jp/r4.8.guideline.pdf>

明治大学: 明治大学レインボーサポートセンター（n.d.）『LGBT等多様な性に配慮した学生生活ガイド』 <https://www.meiji.ac.jp/campus/rainbowsupportcenter/gakuseiseikatsuguide.html>

早稲田大学: 早稲田大学GSセンター（2023）『セクシュアルマイノリティ学生とアライのためのサポートガイド Ver.6』 <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/assets/uploads/2023/03/SupportguideV6.pdf>



澤田彬良 SAWATA, Akira

ミネソタ大学博士課程（高等教育研究科）
University of Minnesota, Department of Organizational
Leadership, Policy, and Development., PhD student in
Higher Educaion. (AY2024~)

76amatou@gmail.com

高等教育/大学論、クィア・フェミニズム研
究、留学生研究、教育人類学
Higher Education / (Critical) University Studies, Queer &
Feminism Studies, International Students, Anthropology
of Education.

↑ **QR: researchmap:** <https://researchmap.jp/sawata-akira-38>